

---

# いつかの落日

カオリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつかの落日

### 【NZコード】

N3140M

### 【作者名】

カオリ

### 【あらすじ】

少年と少女は秘密を共有した。これは彼らに訪れる、別離のお話。

## 二つかの落日（前）

緑の閃光が網膜を焼いた。

もし本当にこれで幸せになれるのなら、もう少し。あと一日だけでも構わないから、今日よりも早く見たかったと思つ。それでこの喪失を、食い止めることができたのなら。

隣に寄り添う温もりは、とても愛おしく思えた。けれど身体から抜け落ちた欠片が、二十一グラムの存在が、今は何よりも重い。

「「めん」

堪え切れなくなつて膝を落とした土の、固い感触を感じてまた涙が零れ落ちた。あいつを攫つて行つた柔らかな風が髪を擦り逃げてゆく。揺れる草木のざわめきと、聞き慣れた川のせせらぎがやけに鮮明だつた。

いつてしまつた。いなくなつてしまつた。それだけがわかる。

「「めん……っ、違うんだ。泣きたいわけじゃないのに」

言いながら、それでも落ちることをやめない零を降り積もつた悔恨ごと、ぬくつた腕で掬い上げられて。浅ましい願いを失つてぽつかり空いた隙間を、惜別の涙に濡れたやわい肌が抱きしめる。愛しさも哀しみも、それから耐えようのない寂しさも、全てを照らす真つ赤な夕陽と一緒に瞼の裏へ閉じ込めた。

目を閉じて想う、握りしめた手のひらの、くしゃりと鳴いた存在の証。

もつけして逢うことのない、大切な、何よりも大切だったお前に。

どうか、  
と、  
祈つ  
た。

## いつかの落田（前）（後書き）

プロローグ（この話）をいれて前26話の中編です。この後別のサブタイトルで本編がはじまり、いつかの落田（後）は最終話になります。しばしお付き合いいただけたら幸いです！^ ^

## 1・ラップトップの神様

サトコの通う中学校には、変人、と呼ばれている少年がいる。

この中学校は生徒数が多く、今まで違うクラスだったので彼のことは知らなかつた。サトコがそれを聞いたのはちょうど三年生に進級したばかりの頃だ。

こいつ変人だから。クラス替え直後の自己紹介で、友人からそう横槍を入れられていた彼。

「うるせえよ、ばーか」

己の不名誉なあだ名を気にする様子もなく、須賀黎也<sup>すがれいや</sup>は笑つた。

それから何となく、サトコは黎也を田で追うよくなつた。純粹な興味からである。

黎也は毎朝遅刻ギリギリに登校して、始業のベルが鳴るなり机に突つ伏して居眠りをはじめるような生徒だつた。課題の提出を忘れてはよく教員から呼び出しを受け、山ほどペナルティーを受け取つて帰つてくる（ただしその課題を提出した例はない）。眞面目に掃除をこなしたことは数えるほどしかないし何をするにも無気力だつたが、なぜかテストの点だけはそこそこ。性格は外交的で人と打ち解けるのも早く、ヨーモアに富んだ発言を多くするため（前述した問題を除けば）教師からの受けも良かつた。

そんな黎也は、生徒たちからの人気も高い。黎也の周りにはいつも人が集まつた。変人、変人と連呼され続けてはいたが、それが俗にいういじめ行為に発展したことは一度もない。

黎也是瞬く間にクラスの人気者となり、誰もが彼を友と呼んだ。

黎也はほんと、最高だよ。変人だけどな。

\* \* \*

【神様の発言】・それで、理由はわかったのかい？

【トーゴの発言】・まだ……

カタカタと音が響く。ディスプレイに向こうにいる相手に送るメッセージ。一文字一文字、キーボードを見ながら入力していたのも今ではだいぶ早くなつた。

これは両親にも教えていないサトゴの密かな日課だ。コンピューターの画面を通した見えない相手との会話、所謂チャットである。サトゴは《トーゴ》というハンドルネームを使って、この《神様》と交流を続けていた。部活を終えて学校から帰宅し、夕食を食べ、自分の部屋に入つたら必ず。毎日毎日繰り返して、もう三年以上の付き合いになる。

【神様の発言】・早くわかつたらいいね

《神様》は聞き上手で、サトゴは一日に起つたほとんどのことを語つてしまつ。

しかし最近サトゴが話す内容といえば、専ら黎也のことばかりだつた。三年生になってからずっと、サトゴは《神様》と一人で黎也を見てきた（と言つても勿論見ているのはサトゴだけで、《神様》は

逐一その様子を聞いているだけだ）。彼の観察を始めてからずいぶん経つけれど、実は肝心なところがサトコにはまだ分からない。

【神様の発言】・“どうしてレイヤは“変人”と呼ばれるのだ？  
【トーコの発言】・それなんだよね

『神様』も知りたがっている、その一点。

須賀黎也は、確かに変わり者ではある。けれど人から言われ続けるほど“変”だとは、今まで見た限りでは思えないのだ。  
黎也のことが気になつて仕方がない理由が、サトコにはあった。本当は直接訪ねたいのだけれど、生憎そんな勇気はない。  
いい加減にしないとストーカーみたいになっちゃう。妙な心配をしながらサトコは文字を入力した。

【トーコの発言】・もつもつと、観察してみるつもり。  
【神様の発言】・報告楽しみにしてるよ、トーコ

サトコには誰にも話したことのない秘密がある。  
黎也がどうしてそう呼ばれるのかはわからないけれど、本当は、

「……須賀くんが本当に、変ならしいの……」

自分のほうが確実に“変人”だと思っている。

## 2・キラルの双子

じゃあな、と片手をあげて友達と別れる。少年は軽い足取りで階段を上った。

所属していた部活はどうにも気乗りしなくなつて、一年の後半あたりから行つていない。最近は暇な放課後を、日当たりの良い図書室で昼寝をしたり漫画を読んだりしながら過ごしている。黎也は一人、のんびりと図書室に足を踏み入れた。

気付けば冬休みがあけて、中学校生活も残り少なくなっている。黎也の通う所は中高一貫の私立なので、外部を受験する生徒以外は気楽なものだ。

自分が“変人”と呼ばれる件について、黎也はとっくの昔にそれを受け入れてしまっていた。むしろその程度のあだ名で済んでいることを好運に思うべきだと考えている。

三年生になつて新しいクラスメイト達と出会つたが、自分のあだ名は自己紹介の段階で広まつていつた。黎也からすれば好都合だ。“これ”が見つかつた時に、言い訳に苦しまなくて済む。

「変人様万歳、だな。……うつせ。良いの。良いんだってば」

誰もいない図書室で一人、黎也は語りかけるように笑つた。

……彼には妙な癖がある。癖だ、と周りには言つてある。これが本当にただの癖ならば直しちゃうもあるが、生憎黎也にやめる氣はさらさらなかつた。

「お前だってそのほうが、退屈しなくて良いってよ」

黎也が図書室を気に入ってる理由は三つある。一つ目は人がいなくて静かなこと、二つ目は口当たりが良いこと。そして三つ目は、大きな鏡があることだ。

「うそ、そう……卒業までこれで通せるよ」

一番奥の壁に立てかけられたその全身鏡が、何のためにあるのかは知らない。じゃあこれは俺達のためにあるんだな、決めつけた黎也はそれを覗き混み、ニヤリと笑顔を浮かべる。

「俺の癖は……鏡に向かつて独り言を言ひ口、ってねー」

『おまえ本当にそれで良いの？ 黎也』変人街道まつじぐら』

他の誰にも聞こえない声が黎也の耳には届いている。

彼の見ている鏡には、黎也の姿と並んでもう一人。背格好も顔付きも黎也そっくりな少年が映っていた。

『今までほんまくいつてたけどさ。次こそイジメられたりして』  
「られねーよ」

“彼”と会話しているとき、黎也はまるで独りで喋っているような状態になる。“彼”を見る事ができるのも、その声を聞く事ができるのも、黎也だけだったからだ。

「俺が今更お前を切り離せるわけないでしょ、」

『……黎也』

「ずっと一緒にいたんだから。そういう、レイ

“レイ”は鏡の中で僅かに目を細めた。黎也が彼の姿を見ることができるのは、こうして鏡を見た時だけだ。声はいつでも聞こえる

けれど、鏡がなければその表情はわからない。

黎也が生まれて十四年と数ヶ月、レイはずつと側にいる。鏡越しに話をすることはもうずいぶん昔から続けていて、今更やめようとは思わなかつた。

小学生の頃こうして一人鏡と喋つているのを友達に見つかり、癖なんだと誤魔化したら、なんと今日までそれで通つてしまつてゐる。楽天家揃いの同級生たちをつくづくありがたいと思った 变人だとは言われるけれど。

「といひで今日の晩飯何が良いと思つ? カーチちゃん帰り遅いらしくつて……つて、レイは食べないからな」

『黎也』

鏡の前に座り込んでのんびり夕飯に思いを馳せていると、レイが固い声を出した。はつと黎也が振り返ると、閉じたはずの図書室のドアが開いている。

さらに視線をすらせば、見覚えのある少女が入り口の側で棒立ちになつてゐるのが見えた。

「アンタ……」

声をかけようとした瞬間、少女はぱっと踵を返して逃げるような部屋から出て行つてしまつ。

『聞かれたな』

「それはまあ平氣でしょ。逃げられるとは思わなかつたけど……」

それよりあいつ誰だつけ。呟くと、レイが奢めるよつた声を出した。

『同じクラスにいたぞ？ お前つていつもそうだ。友達多く見えて、

他人の名前とか覚えてない』

「……苦手なんだよ。えーと、確かになんか変な名前なんだよな。あ

……ア……』

『アキミヤ、だる』

「え」

良く知つてんねお前。黎也は驚いたように鏡中の少年の顔を見た。

「あーそうそう。安芸サトコ、だ」

## 2・キラルの双子（後書き）

本編のサブタイトルは「ラップトップ」と「キラル」が交互に続きます。どちらかといえば前者がサトコ寄り、後者が黎也寄りの話です。

3・ラップトップの神様（前書き）

### 3・ラップトップの神様

(　　なに、)

ばくばくとフル稼働している心臓を服の上から押さえて落ち着ける。高鳴る鼓動の理由は、家まで全力疾走したから、だけではない。

(なにあれ、なにあれ……っ?)

疑問符がサトコの頭を埋め尽くす。同時に、とうとう見てしまった、と漠然と思った。

サトコが図書室に入つたのは本当に偶然で、断じてあの少年の後をつけていたわけではない。本を返し忘れた友人に代わって返却を買って出ただけだ。その友人はといふと、体調不良で昼前に早退してしまっている。

「麻由美に感謝、かな……」

熱を出した友達に対し不謹慎なことを思い浮かべ、サトコは自室のドアを開けた。結局麻由美の本は返すことができないままで、家まで持つてきてしまったのだが。手に持つたままのハードカバーには“本当に怖い学校の怪談！”と書いてある。読む気にはならなくて、そのままベッドに放り投げた。

「あと……三分」

壁に掛けられた時計の針を確認する。十七時五十七分。

サトコはそわそわしながら古びたパソコンの前に座った。《神様》

と話をするためだ。サトコの部屋にあるパソコンはノート型をしているけれど、大きい上に“ひごつ”してて不格好である。とても持ち運びには向かないだろうこれは一昔前に、“ラップトップパソコン”と呼ばれていたのだと父親から聞いた。

【“トーコ”が入室しました。／××・01・16／18・00】

十八時ちょうど。タイミングぴったりでサトコはラップトップを起動し、唯一登録してある那个チャットページを開いた。一言だけ書き込んで早く、とそれだけを思う。願いが通じたかのように、数秒待つただけですぐ《神様》は現れた。

【トーコの発言】：神様、来て！！

【神様の発言】：…んばんは。トーコ

いつもは律義に挨拶を返すところだが、今日のサトコはいきなり本題を書き込んだ。冷めやらぬ興奮のせいか、まだ心臓がどこかふわふわしている気がする。

口で言うよりは数段遅くなるタイピングにやきもきしながら、サトコは今さつき見聞きしてきたことを文章にしてゆく。友達が熱を出したこと、代わりに本を返そうとしたこと、放課後図書室に行つたこと。キーボードを押すたびに指が震えて、何度も打ち間違いをした。

た。

【トーコの発言】：……でね、図書室に入つたら、須賀くんがいた。  
一人だったんだけど、

須賀黎也は、鏡に向かつて喋っていた。否、正確には、鏡に映つた自分と喋つていた　というところだろうか。

もし自分が見たものが見間違えでなければ、なるほど黎也は変人な

のかもしない。考えながら、そこまで書ききつて一先ずサトローは息をつく。焦りすぎて支離滅裂になつた文章もあつたが、なんとかニコアンスで読み取つてもらえただらう。

サトローの報告に、『神様』はひどく興味を示したようだつた。

【神様の発言】 …とても面白い。トーローは、なぜレイヤが鏡に向かつて喋つていたと思つ?

【トーローの発言】 …えつと……

ようやく冷静さを取り戻した頭でサトローは考える。一番無難な答えは“独り言”だ。けれどサトローにはどうしても、あの光景を見た瞬間の違和感が拭えなかつた。鏡と向かい合つていた黎也。たつた一人で続けられていた“会話”。

【トーローの発言】 …あのね、よくわかんないんだけど……あれは独り言とは違う気がした。

【神様の発言】 …どう違つたんだい?

【トーローの発言】 …ひとりで喋つてるにしてはね、不自然な間があるんだ。

独り言つて、ひとりで喋つているわけだから内容は続いてるはずでしょ? サトローは慎重に考えを書き込んでゆく。『神様』はどんなに時間がかかるても、サトローが入力を終えるまでは余計な口をはさまない。まるで、サトローのタイミングが見えているかのようだ。

【トーローの発言】 …須賀くんは、まるで誰かと喋つてるみたいだつた。話を聞いてるみたいに黙つたり、相槌を打つたり、それに……

誰かの名前を呼んだ気がした。そこまで書き込んで、ようやく『神様』からいられが返つてくる。

【神様の発言】…そう、トーコの勘はきっと正しい

【トーコの発言】…正しこって？

【神様の発言】…レイヤは、誰かと喋っていたのだろうね。トーコや他のみんなから見えない誰か……

【トーコの発言】…そんなことつてあるの？

【神様の発言】…あるかもしれないけど、他の誰よりもトーコが知つているだろ？

『神様』が笑つたのが見えたよつた気がした。思わずキーボードを打つサトコの手が止まる。

同時にふと何かの気配を感じて振り返つても、ここは自分の部屋だ。女の子にしては珍しいと言われる殺風景なこの部屋には、サトコと必要最低限の家具、そしてこのラップトップしかない。

【神様の発言】…だとすれば、レイヤの相手は鏡の中だ

とても面白い、と『神様』がまた書き込んだ。画面の中の彼　男かどうかはわからないが、口調から男性だろ？と勝手にサトコは思つてゐる　は、黎也のことがとてもお気に召ししたらしい。また何かあつたら教えてほしいと『神様』が書つのド、サトコも了解の旨を書き込んだ。

【神様の発言】…そうだ、トーコ。約束まであと一ヶ月を切つたね

不意に現れた文字にサトコは身体を強張らせる。うん、とかうじて返事を入力してラップトップの電源を落とした。サトコ、と一階から夕飯を知らせる母の声が聞こえる。今日は急いでいた為にまだ食事をとつていなかつたのだ。

電源を切る寸前、楽しみにしてゐるよ、と『神様』が書き込んだの

が見えた。

「サトロー、早く来なさい、」飯冷めちゃう

「はーい！」

叫ぶように返事をしてサトロは部屋を後にした。リビングに続く階段をなるべくゆっくり下りながら、その間に考える。  
須賀黎也には、本当に何が見えているのだろうか。彼にしかわからぬ話し相手が、いるのだろうか。

だとしたら黎也は、サトウを助けてくれるだろ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3140m/>

---

いつかの落日

2010年10月14日13時58分発行